

「補綴精度を向上させる為の理工学的アプローチ」
～チェアサイドと共に臨床的最適解を探る～

私のラボはいわゆる小規模ラボです。高い生産性を持つファクトリー型ではなく、歯科医院のコンセプトに沿って製作するラボラトリー型の技工所です。また、博多メディカル専門学校で非常勤講師を勤めている事もあり、取引先の歯科医院から様々な疑問や質問をもらう事があります。

「印象材はすぐ流すべきだという人もいるし、消毒の為にしっかり固定液に漬けた方が良いという人もいるけど、消毒中に変形は起こっていないのか？」「12%金銀パラジウム合金は天然歯に対しては硬すぎるという意見は本当だろうか？」「どんな補綴物でも、急速加熱型の埋没材で作って本当に適合しているのか？」「シリコニアブリッジが適合は問題なさそうなのに割れることがあるんだけど、どうしてだろう？」などなど様々な材料について質問を頂きます。「メーカーはこの様に言っています」「おそらく大丈夫です」とは答えたくないなので、可能な限り自分で実験する様にしています。歯科医の先生と一つの作業行程を確かめ、再現性の高い理工学的なアプローチで解決していく事が、ラボラトリー（研究所）のやり方だと考えているからです。

今回はその様な歯科医院からの質問を受けて、実際に実験を行って臨床的な最適解を探ったケースを幾つか紹介させていただきます。午前中は天然歯補綴に関して、午後はインプラント補綴に関して、臨床例を交えながら解説いたします。